



【発行者】

東村立高江小学校

校長 知花 人

TEL : 43-2683

FAX : 43-2523

学校教育目標：自ら学び、考え、行動し、たくましく生きる 心豊かな高江っ子の育成

みんなの言葉が新聞に！ 広がる学びの輪

高江小学校では「続きのある学び」に取り組んでいます。1つの学びを単体の教育活動に留めず、広がりや繋がり、次への展開を意識しています。その取組の一つである新聞投稿について3年生と5年生の作文を紹介します。



学校便り⑥号紹介行事
「ビブリオバトル」

新聞へ投稿

私もたくさん本を読んで、みんなに紹介したいです。

うれしいビブリオバトル1位
東村立高江小3年 森 なつめ

わたしたちの学校です。
は、今年もビブリオバトルがありました。自分なりの好きな本を、みんなの前で発表し、お客さんにどう評価してもらい、1位を決めます。
わたしがしようかいした本は『おじいちゃんとおばあちゃん』です。死なないうちのじいちゃんやばあちゃん、孫の Erick は、わたしが1位になったのを見て、さがるしかったです。これからは、孫の Erick に『さようなら』のお別れを言うのをわすれていたことを、さいごに『さようなら』を言えてよかったです。



学校便り⑦号紹介行事
「慰霊の日 特設授業」

新聞へ投稿

作文が新聞へ掲載後、児童の元にお手紙が届きました。送り主は退職校長会の親川一久会長。手紙には二人の作文に感銘を受けたことや今後の活躍、激励がしたためられていました。

11歳少年の心の痛みや叫び
森つくみ 小5

平和学習で比嘉恵理香先生と地域の方に、平和について教えていただきました。

比嘉先生のおじいちゃん、サイパン島で生まれ、11歳の時に米軍が上陸して戦場になりました。11歳の少年は、次々と目の前で家族を失いましたが、生きることが大切だと思い必死に逃げ一人ぼっちになりました。

私と同じ11歳の少年の心の痛みや叫びが聞こえてきそうです。戦争は「命とど

地域の方のサヨさんは、戦後の貧しかったころの話を涙を流しながら語ってくれました。「食べ物もなく、苦しい生活を思い出すだけでも胸が痛い」と語り、今日、学んだことを家族や友人にも伝えていきたいです。(東村・高江小)

10月 ～高江小 歳時記～ 行事予定

地謡の皆さんとエイサー合同練習を予定しています。(場所：公民館 時間：18時)

10月7日(水)・14日(水)・21日(水)

10月31日(土)リハーサル(高江小運動場)

10月
7日(水) 午前授業(午後1時下校)

13日(火) **ビブリオバトル in 公民館**
午後2時予定

16日(金) 5年カヌー体験(午前)

19日(月) 運動会事前作業～トラック整備

31日(土) 運動会前日作業(9時30分)
テント・環境整備等

保護者・地域 郷育・絆・連携

地域とともにある学校づくり
～学校が人を創り、人が地域を創り、地域が学校を創る～

王亮

王求

素行

幸段

2026年(令和8年)10月1日

高江小の登り窯 寸劇で描く 東・高江成人会

【東】東村の高江公民館(高江地域活動拠点活性化施設)で9月19日、豊年祭が行われ、高江成人会が東村立高江小学校の登り窯を題材にした寸劇を披露した。高江小の登り窯は、県内の公立学校で唯一現存する登り窯とされる。約30分の寸劇では、登り窯がどのように地域に根付き、受け継がれてきたのかを、ナレーションを交えながらコミカルに描いた。

公立学校で唯一 地域の交流の場

初代の窯が造られたのは1979年。背景には、当時同校で美術教員を務めていた比嘉敏夫さんの「やんばる地域の造形教育にはやちむんが必要」との思いがあったという。その後、同校に赴任した美術教員の知花博康さんと大宜味村の陶芸家・田場白文さんが修復や改良に携わり、2代目の窯が完成した。

焼き物クラブが始まり、火入れの際には教員や児童生徒、保護者、区民が集まり、一大行事となったという。登り窯は、やちむん教室や、地域の人たちとの交流を通して自然や歴史・文化を学ぶ「ていーだ学校」(村

教育委員会主催)などでも活用されてきた。

しかし、2017年の高江中学校閉校を機に、登り窯は使われなくなった。その後、地域で復活させる動きが起こり、誂谷村で陶芸を修業していた森貴希さん(46)に出会う。現在も登り窯は地域のやちむん文化の拠点として、火入れの際には住民らが集う交流の場となっている。

寸劇には教員らも協力。高江小の知花入校長は、自身の父・博康さん役を演じた。重量挙げやプレイキン、三線など、それぞれの得意分野や個性を生かした出演者が登場し、会場の笑い



寸劇で登り窯の火入れの場面を会場一体となって作り上げた高江区豊年祭
＝9月19日、東村の高江公民館

と拍手を誘った。

また、火入れの場面では、登り窯から煙が出るトラブルに対処しながら焼成温度を上げていく苦労を、温度計を模した大道具などを使って表現した。

本人役で出演した森さんは「コミュニティーの中にいることを実感した。つながりを大事にしながら、続けていきたい」と話した。脚本・演出・主演を務めた同校PTAの荘司剛さん

(47)は、窯を造った教員に会いに行ったり、当時を知る区民からも話を聞いたりして、ストーリーを膨らませた。「劇を見た地域の人たちが笑ってくれて、よかった」と話した。

仲嶺久美子区長は「昔を懐かしく思い出した。火入れの時はにぎやかだった。沖縄の学校で唯一、登り窯がある高江にぜひ来てほしい」と呼びかけた。

(山本真知子通信員)

高江校の伝統である登り窯の成り立ちや歴史を通して、学校と地域の繋がりの様子が垣間見えました。自分(校長)も高江校の火入れの記憶が幼心に残っています。使われない時期をのりこえ、薪をくべ、再び登り窯に命を吹き込んだ森さん、そしてコミカルな演出で会場を沸かせてくれた保護者・成人会の皆さん、ありがとうございました。



9/19 高江区豊年祭
児童・職員も楽しく参加できました。ありがとうございました。



9/30 PTA 役員会&各部会
11名参加・図書室

協議事項

◆11/1 運動会

- * 事前作業(保護者)
- * 前日準備・作業(児/職/P会員)
- * プログラムの変更点
- * 片付け等

◆各部会

(体育/環境/執行)